

国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(5)

劉 玲

本稿は、中田祝夫編抄物大系(勉強社1977年)所収の、国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』(影印本)を底本として使用する。当該抄物の成立、資料的価値については、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(1)」(筑波大学人文社会研究科『筑波日本語研究』第17号)を参照されたい。本稿では、前記拙稿、及び「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(2)」(同18号)、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(3)」(同19号)と「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(4)」(同20号)に引き続き、主として、抄中に引かれた漢籍及び集成している五山僧の諸家に注目し、それをできる限り明記して、本抄物を解読する際の手がかりになるようつとめる。なお、翻刻・校注上の諸事項については、前記の諸稿に詳しいが、要点また前記の諸稿において説明していない事項について記しておく。

- 一 翻刻の範囲を底本の一八五頁から二〇四頁とする。
- 一 基本的に、原典テキストが写された方形の枠線の後に

置かれている抄文の部分を翻刻の対象とする。若干、その枠線内及び枠線外の周辺に書き込んだ小文字書きの抄文が存在するが、影印本で判読しにくい箇所が多いため、本稿では翻刻しないことがある。

- 一 漢籍の引用が見られる場合、その書名または篇目や章節名、作者名に線で記す。例えば「石林詩話云……此理甚易知也 雪本 漁隱二十二(一八九〇)」、
「山谷書摩崖碑後詩 事有「レ」至「難天」幸尔」(一八七〇)、「虞伯生詩 風雨一變衣冠地 城郭朝來水石口」(一九四二)、「唐李頎歌曰 石季竜 偕「レ」天「レ」禄 擅「レ」雄豪 美人姓鄭名櫻桃……鹵簿新(一九七二)」、
「杜詩 聖朝無棄物 老病獨成翁之類也」(一九九〇)など。
少数、書名未記載だろうと思われる場合が見られる。今回、一々原本で確認するに至っていないが、『国学宝典』
<http://www.gxbd.com/>、¹⁾「中央研究院漢籍電子文獻瀚典全文檢索系統」(<http://hanji.sinica.edu.tw/>)、²⁾『中国基本古籍庫』(黄山書社出版)を檢索資料として、これらの資料にほぼ同様な本文が檢索できた場合に、「溫公曰 唐之曲江 安史乱後……落霞亭」(一九五六)と

あるようにその最初の部分に——で記す。また、【】内において説明することがある。なお、書名などの記し方については、拙稿『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況」（筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』55号）において検討しており、参照されたい。

— 前記の検索資料に比較した際、引用された漢籍の文章において、文字や行文の誤記だろうと思われる箇所も見られる。例えば、「才子傳」から引かれる「韓偓 字致堯……」（二〇二一）において、「李彦弼偓甚」を「李彦弼偓甚」に、「天祐二年」を「天祐六年」に誤植されたり、同じく「才子傳」から引かれる「太中末 山北沈侍郎主文……」（一八六〇）においては、「仍献啓千餘言」とあるべきところに「献」字が脱落したりしている。これらについて、当時に引かれる漢籍の底本がまだ明からしていないため、今回特に改めず、底本の通りに翻刻する。

— 前記の検索資料に比較した際、文字や行文以外に、「杜牧 春風十里朱簾捲之勢也」（一九四）に見えるように、作者（山谷の詩の誤記）を誤って写している場合が少数ある。【】内において記すことがある。

— 幻雲抄に集成している五山僧の諸家の説については、次のように——線で記す。例えば、「雪本云 新曲言胡

地樂 以是為学 是夷狄乱入之兆也（一八八〇）、「嗅野梅 或説云 重榮無罪而遇害 今世如此……」（一九〇二）においては、「雪本云」（蘭坡景菫の説）、「或説云」（誰の説か明記していない場合）の部分に——線を引く。また、「村講云 續翠云 下ヲ 鳴鴉トセハ 上モ 吠犬トスヘキカ 雞犬トスルヲ 偏躰也」（二〇三〇）に

ついては、「下ヲ……」より以降はおそらく「村講云」（希世靈彦の説）において「續翠云」（江西竜派の説）が引かれていると見られるような箇所について、「村講云」並びに「續翠云」の両方に——線を引く。「養案 或云 練漉ハ 物ヲ モミクサラカス 意也 低一ハ 五蔵ノ 低一摧シテ ナル意也」（一九〇二）とあるように、「或云」とあるように誰の説か不明である場合についても、同様に処理する。ほかに、「或曰」と記された場合もある。

— 漢字については、底本の形態を重んじ、異体（略体・俗体を含む）の文字をできるかぎりそのまま写す（末尾「異体字一覧」に掲げる）。そのまま再現できない場合は通行体に改めるが、一々説明しない。例えば、「李疑年」（一八五二）・「李商隱」（一八六二）・「偓畫策称旨」（二〇二三）など。なお、一部誤読を招きやすいものについては、【】内において通行体の文字を（ ）内に入れて記すことがある。また、若干□で示し、【】内

- において【□「オ*旁」】(二九〇八)【□「門*タ」(聞)】(一八五二)【「土+巴」(声)】(一八八六)のように示す場合があり、*印はその二字(時には偏旁冠脚)を左右でまたは内外で組み合わせた文字を、+印はその二字(時には偏旁冠)を上下で組み合わせた文字を意味する。なお、初出以降は特に一々記さない。
- 一 小文字で二行書きにしてある箇所が少数あり、「ノ」印で改行を示す。例えば、「雪本 潤隠 二十二 杯 玉云」歩候反 手掬物也(一八九二)とあるのは、「云」字から改行している。
- 一 仮名については、「子」を「ネ」に改めず、そのままに写す。合字では、「メ」を「シテ」に、「一」を「コト」に改める。
- 一 踊り字については、漢字の場合は「々」に、仮名の場合は「ゝ」に統一する。なお、仮名二つ以上の場合には、「アラコトコトシト云タシタヤ」(二八六二)のように繰り返して写す。
- 一 振り仮名はそのまま写す。
- 一 濁点はそのまま写す。
- 一 返り点、一・二点と上・中・下点は、「レ」、「一」、「上」などのように「」に入れて記す。
- 一 転倒符、挿入符、書入れ指示については再現できず、【一】内において説明する。

- 一 見せ消については■で示し、【一】内において説明することがある。
- 一 その他
- ・ 頁数は底本のそれに従い、漢数字で記す。また、あらたにアラビア数字で行数を記す。
 - ・ 句読点は特につけず、底本の朱点により一文字分をあげることにする。なお、破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判明できない場合に、校注者の判断による。
 - ・ 漢字や仮名について、破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判読できない場合に、□で示す。推測されるものがあれば、それを□の中に入れる。
 - ・ その他の説明事項があれば、【一】内において記す。
- 一八五
- 一 贈弾等入 本集云 送李疑年 疑ハ 亀□ 幻謂 未見温本集 以俟傳□【この行まで「贈弾等入」原典テキストが置かれている】【「亀□」、□「与*欠」(敷)】【「傳□」、□「門*タ」(聞)】
- 二 梅云 彈等入 非樂工 註引房処士云々 盖旧宮人也 非老男也 新唐書列傳 温大雅附傳【「傳」「温」間に挿入符あり、右傍に「十六」。「列傳十六」にすべき】

一八六

一 温庭筠 才子傳 庭筠 字飛卿 旧名岐 井州人 宰相彦博之孫也 少敏悟天才 能走「レ」筆成「レ」万言

【善】「彦」右傍に「温」とあり、「彦博」は「温彦博」の意

二 鼓「レ」琴吹「レ」笛 云 有絃即彈 有孔即吹 何必爨

桐与柯亭也 側詞絕曲 与李商隱齊「レ」名 時号温

三 李 云々 太中末 山北沈侍郎主文 特召庭筠試於簾

下 恐其潛救 是日不樂 逼先請出 仍啓「逼」「先」間に挿入符あり、「先」右傍に転倒符及び「暮」。「逼暮先請出」にすべき

四 千餘言 詢之 已占授八人矣 執政鄙其為 留長安中

徐除 宣宗微行 遇於傳舍 庭筠不「不」左下より書入れ指示あり、「識」とある。「庭筠不識」にすべき

五 傲然■詰 之曰 公非司馬 長史流平 又曰 得非文參簿尉之類 帝曰 非也 後謫方城尉 云々 ■「語」見せ消

六 庭筠仕終國子助教 竟流落而死 云々

七 補云 此詩親見天寶太平 感今日零落者也 然庭筠宣宗大中々人也 自玄宗至宣宗十一代也

八 自天寶元年至太中十三年 百十六也 豈當太中末 有 天寶年中人哉 實為可怪 此集謬詩人名

九 者 不鮮矣 疑是伯明誤以別人作為庭筠作乎 不然後

世賛杜子美 賛李太白之類乎 庭

十 筠善鼓琴吹笛 則此篇必庭筠作乎 桃抄 亦

辨年代相隔之事

十一 箏 雪本云 箏者 古以竹為之 秦樂也 一説秦人

薄義 父子爭瑟 而分之 因以為名 或曰 秦蒙恬造

長六尺「恬」右傍に「徒兼反」

十二 以應律 弦十二 象四時 柱高三寸 象三才 ム案

吏統二十二引風俗通 箏者 上圓象天 下平象

十三 地 中空準六合 弦柱擬十二月 乃仁智之器也 今

并涼二州 箏形如瑟 不知誰改也 風俗通

十四 天寶——アラコトコトシト云タシタヤ 統翠云 十

四字ノ中ニ 昔盛衰ヲ 言尽ス也 當太平時彈一曲

則滿堂【□「フナ竜」(寵)】

十五 皆喜 其後玉妃死馬嵬 玄宗鼎南内 則事々相違ホ

トニ 昔ハ 面白ク 彈タル箏モ 今ハ 零落シテ

一曲モ彈 則

十六 淚万行也 此□諷天下也 【□「言*之」】

十七 補云 唐土ノ箏ハ 日本琴也 唐土琴大也 詩意ハ

庭筠与彈等人昔在先帝御前 見シ斐ヲ 共語出シテ

十八 カナシイ時分ニ 箏ヲトリ出シテ 一曲奏ホトニ

皆ハラリト 泣也 如雍門彈琴也 世ノ乱モ 依伊州

曲也 伊州ハ 日本ノ

- 19 大和歌類也 飾箏以蟬与雁者 蟬者取□高之義 雁取帛鴈■操之義也 桓譚新論 雍門周以【□「士也」】(声)【■「掃」見せ消】
- 20 琴見孟嘗君 々曰先生鼓琴 亦能使天悲乎 對曰竊為「レ」足下 有所悲 千秋万歳後 墳■墓生【■某字見せ消】
- 21 荊棘 游童牧■ 躑躅而歌其上曰 孟嘗君之尊貴亦如是乎 孟嘗君喟然太息 淚承「レ」睫【■某字見せ消、左傍より書き入れ指示あり「豎」。「游童牧豎」にすべき】
- 22 而■未下 雍門周引琴鼓之 孟嘗君遂戲歛而就之
- 23 春抄云 彈箏人 若非玄宗時人 如何 盖此箏力玄宗時ノ箏也 以此箏教寧王タシモノソカシ 今ハ零落シタ
- 一八七
- 一 モノカナ 故生感也 又ハ 彈箏人之先祖 曾事玄宗 教寧王歟 又兩処有曲字 前ノ曲字 謂箏譜 後ノ曲字 謂箏声 ソレマテモナイ 杜常 風入兩字 其例可攀
- 3 玉皇 桃云 玉皇ハ 道家ノ本尊也 佛氏ハ 三生如来ヲ 本尊ニスル□ニ 道士ハ 三清ヲ 本尊ニスルソ 今指玄【□「木々羨」(様)】
- 4 宗曰玉皇 盖譏玄宗道教也 幻謂 未必如此乎
- 用仙家故事 美天子是常事也 東坡詩 侍
- 5 臣鵠立通明殿 一朵紅雲捧玉皇 盖指哲宗也 何曾譏之哉 又唐音遺編 玉皇作上皇 々々亦指玄
- 6 宗 盖禪位於太子之後 皆称上皇也 山谷書摩崖碑後詩 事有「レ」至一難天上幸尔 上皇踟躕□【□「レ」不(還)】
- 7 京師 注肅宗至德二載 十二月上皇天帝至自蜀郡
- 8 梅云 事「二」玉皇「一」教「二」寧王「一」言彈箏人年已衰老 故疑教寧王歟 事玉皇歟 盖寧王与温年代相【「相」後に挿入符あり、挿入符右傍に書き入れ指示あり、「隔矣」とある。「相隔矣」にすべき】
- 9 題注 筑声 々當作身 事文類聚箏部 風俗通 箏秦声 五絃筑身 又云 箏者 上圓象天
- 10 下平象地 中空準六合 弦柱十二 擬十二月 乃仁智之器也 今并涼二州 箏形如瑟 不知誰改也
- 二 又旧註作築字訛 韻會 箏注 說文鼓弦竹身樂也 徐曰 古以竹為之 秦樂也 一說 秦人薄義 父子【「作」「築」間に挿入符あり、左傍に「築」。「旧註作築築字訛」にすべき】
- 12 争瑟 而分之 因以為名 箏 以瓜鼓之 其長六尺 取之六律 絃數十二 取之十二月 其柱三寸 取之天地人之三才也
- 13 寧王 旧註 寧王名成器 避昭成大子諡 改名憲

- 武后文明元年 立睿宗 仍立寧王為皇太子 從以楚王
 14 □□ 有討韋氏功 固讓儲位 薨 諡讓皇帝
 15 旧註 玄宗即位 命寧王主蕃邸_シ樂 以元大常 分西
 朋而争優劣 置教坊於内宮 時有馬仙期李龜年
 16 賀懷智□ 皆曉音律 及祿山陷長安 寓凝碧池 盛
 奏衆樂 梨園弟子 往々泣下 其後李龜年流廢【□「サ
 十寺」（等）】
 17 江南 每遇良辰美景 為人歌闋 座上聞者 無不掩
 淚而罷
 18 雪樵講云 鈿蟬ハ フト、メ也 金鴈ハ コトヂ也
 19 鈿蟬——留絃之處 為蟬象以附之 絃柱飾以金 為
 鴈象附之 金雁 桃云 絃ノ下ニ 立ル柱ヲ 金ニ
 テ作タン 其連
 20 兒 如雁行 唐音遺響 張泌春曉謠 鈿箏斜■倚畫
 屏曲 零落幾行金鴈飛【■「屏」見せ消】
 21 詩林万選 十五 周端臣 古斷腸曲云 彈罷瑤箏歌_カ
 鴈行 月移花影上廻廊【歌】左傍に「虞謁反 散也」
 22 註攻□ 韻會 玉篇等 無□字 五音新改篇 □音
 □義同 又□公回切 大兒 又美也 盛也 偉也
 【□「無□字」□音、□「王*回」□音□「又□」、
 □「瑰+衣」(瑰・壞)】

一八八

- 一 註 挨 玉篇 乙駭切 推也 桃抄云 注
 播迂ハ 出奔也 悖
 2 雪本云 鈿蟬金鴈 案李昌祺剪刀餘話 秋夕訪琵琶亭
 記云 洪武初 吳江沈韶偕梁陳二生 訪
 3 琵琶亭 吟白司馬芦花楓葉之篇 想京城女銀瓶鉄騎之
 韵 引睇四望 徘徊久之 于皆月明風
 4 細 人静更深 方取盃共酌 聞月下有歌声 弋麗人
 宮粧艷飾 兒類天仙 小姬前導 韻因問其【「士+巴」
 (声)】
 5 其姓氏 曰 妾偽漢陳主婕妤鄭婉娥也 年二十而死
 殯于庭 近二侍兒 一名鈿蟬 一名金雁云々 盖以
 6 以温庭筠此詩 名二姬乎 雪本 天宝云々 全篇言李
 龜年在天室中以胡部樂教王也 祿山乱後【「教」「王」間
 に挿入符あり、左傍に「寧」。「教寧王」にすべき】
 7 樂工失時 故鈿蟬金鴈亦俱廢矣 苟今有彈伊州一曲
 則使人淚万行下也
 8 雪本云 新曲言胡地樂 以是為学 是夷狄乱入之兆也
 鈿蟬云々 二句言 □歷歲月 久不修飾【□「ム+虫」
 (雖)】
 9 今取出之 彈一曲 則昨遊事来于懷 洒万行淚也
 10 和云 叔夏初彈悟晋皇 胡笳謾自泣賢王 鶯吟燕語
 声悽切 白髮騷人淚兩行 注云 箏声
 11 如鶯吟燕語也 注賜進士河東李泰做通集注

12 樵本 三山老人語泉云 六一居士喜溫庭筠詩 雞声

茅店月 人迹板橋霜 嘗作過張至秘校莊

13 詩云 鳥声梅店雨 野色柳橋春 效其体也 漁隱二

十三

14 桃抄 此彈箏人ハ 天寶中ニ 玄宗ニ ツカヘテ

寧王ニ 樂ヲ教ルホトノ 樂ノ上手也 鈿蟬ハ 箏ノ

飾ニ 金ヲ以テ 蟬ヲ

15 作タソ 金鴈ハ 弦ノ下ニ 立ル柱ヲ 金テ 作タ

ソ 柱ノ ナリハ フタマタテ 鴈ノ 飛ツラナリタ

様ナソ 其様ナ飾トモ

16 カ 今ハ 皆零落シタソ 皆零落ト云中ニ サシモ

玄宗ノ 五十年太平ニ アツシカ アマリ ヲゴリヲ

キワメテ 胡樂

17 ナントヲ 起テ センナイ吏ヲ セラレタ程ニ 世

ヲ乱タヨ サルホトニ 此箏モ 零落シタヨト 云心

カ 此七字ノ中ニ キツカトアルソ 【乱タヨ】、【タ】

【ヨ】間に挿入符あり、右傍に「ト」。「乱タトヨ」にす

べき】

18 其ハ 此一曲ヲ 彈スレハ 面白カリツルカ 今日

ハ 此一曲ノ 伊州ヲ 彈スレハ 昔ノ吏カ 思出サ

レテ 感慨カ 起テ アマリニ 悲サニ

19 涙カ 千万行落ソ 彈箏人カ 落【レ】涙ト云義モ

アリ 聞者皆啼ト云義モ アリ 此彈箏人ト 玄宗時

人テ ナイ

20 ナラハ 何事^レ可見ソ ナレハ 彈スル人ハ 誰テモ

アレ 此箏カ 玄宗ノ 時ノ 箏也 此箏ヲ以テ 寧

王ニ 教タシソ カシ 今ハ 零落

21 シタモ^レカナ サルホトニ 感慨カ 生スルソ 又

ハ 此彈箏人ノ 先祖 昔吏玄宗 又寧王ニモ 教タ

歟ソ

一八九

一 韋曲 桃抄云^レ或云^レ 此題不審 一義 彦謙在韋曲

作乎 在河北思韋曲作乎 此義無用也 未必不審【この

行まで「韋曲」原典テキストが置かれている】

2 彦謙 新唐書列傳十四 唐僉附傳

3 才子傳第九 彦謙 字茂業 并州人也 咸通末 舉進

士及第 中和王重榮表為河中從事 歷節度副使 晉絳

二【茂】左傍に「モ」【中和】右傍「僉宗」】

4 州刺史 重榮遇害 彦謙貶漢中掾 興元節度使楊守亮

留署判官 尋迁副使 為閬州副使 卒 彦謙才高

5 負氣 毫髮逆意 大匠禁 博學足藝 猶長于詩 亦其

道古心雄 發言不苟 極能用事 如自己出 初師溫

6 庭筠 調度逼似 傷多纖麗之詞 後姿淳雅 尊崇工部

唐人効甫者 惟彦謙一人而已 自鹿門先生 号【自】

「鹿」間に挿入符あり、行末尾に「号」と書かれ、右傍

に転倒符ある。「自号鹿門先生」にすべき」

7 石林詩話云 楊太年刘子儀皆喜彦謙詩 以其用吏精巧
對偶親切 黃魯直詩体雖不類 然不以楊 【冒頭「石林
詩話」右上に「雪本」とある】

8 刘為過 如彦謙題高唐云 耳聞明主提三尺 眼見愚民
盜一抔 每稱賞不已 多示学詩者 以為模式 三

9 尺一抔 雖是着題 然語皆歇後 一杯事瓦兩出 或可
略土字 如三尺 則尺律三三三尺喙 皆可 何独劍乎

耳聞明主【「則」「尺」間に挿入符あり、「律三」、「三」
右傍に転倒符ある。「則三尺律三尺喙」にすべき】

10 眼見愚民 尤不成語 余數見交遊道魯直語 意不可

解 蘇子瞻有買牛但自捐三尺 射鼠何勞挽六鈞

11 亦同此病 六鈞可去弓字 三■尺不可去劍字 此理
甚易知也 雪本 漁隱二十一 杯 到_レ歩候反 手搦物也

【「字」見せ消】

12 欲寫——統翠云 此詩不審也 逢天下乱 憑重榮
則其人已死 ホトニ 我此懷ヲハ 天下奇才ナリトモ

不可寫出 況不才而多情

13 練漉後乎 鍊ハ 堅金鍊則柔也 漉ハ 濁水モ 漉
則清也 我ハ 乱後自离別故郷以來 無定跡 故嗅花

寫愁也 此詩

一九〇

一 用義之故事 不露也 猶如不云甘棠 而云棠梨一樹花
也

2 養案 或云 練漉ハ 物ヲ モミクサラカス 意也
低一ハ 五藏ノ 低一摧シテ ナユル意也

3 雪本云 欲寫云々 二句言 彦謙自欲寫腸 則已多情
練■漉 蓋寫之無才 故低摧也 此二句 村庵云 以

有 限才 欲寫无限愁 則被多情練漉甚低摧也

4 雪云 窮郊——二句言 於韋曲二月之時 初与王重榮
离別 縱有梅花 誰与玩之 故唯自有憂乱惜別之情

不勝

5 言 而撚梅花嗅之而已 村菴曰 當二月花開之時 初

离王重榮 其懷无措 不獲止 撚花嗅之 慰懷也

7 查云 初者 二月之初也 村菴■甚為非【■「村
庵」二字見せ消】

8 桃云 練漉ハ 如「二練絹則柔」一「々吾氣性モ 衰

ヘハテ、志モ 尽タル也 漉ハ 如「レ」漉「レ」水ニ
心ヲ カキタテ、 □漉スルヤウニシテクタヒレタソ

【□「オキ勞」】

9 低摧字 属不才 練漉字 属愁腸 平生雖有治天下致
太平之心 手モ カモ ナウテ 摧ケ ウセタソ 志

ノ サカリテ 摧 ウセタ【「ウ」「テ」間に挿入符あり、

右傍に「ナツテ」。「ナウナツテ」にすべき】

- 10 □□ハ 又ハ 多情ニ 練漉セラレト 讀タ時ハ 此身カ 低摧スル意歟 村義同之
- 11 窮——在漢中作ルナラハ 窮郊ハ 韋曲ヲ 云ソ 寒村ハ 田舎ノナリソ 在韋曲作ルナラハ 窮郊ハ 田舎ノナリ 寒村ハ
- 12 韋曲ヲ 云ソ 離別ハ 与重榮別也 東漸義云 昔 於韋曲与重榮別以來 独倚漢南寒村 嗅梅耳
- 13 蘭云 低摧 言身疲倦如摧也 窮巷 言韋曲捨郷 寒村指韋曲中之一村 則何重複乎 是村義也 村又云 以有限才 難
- 14 寫無限愁也 初字非二月初 只言初与知音別也 或云 重榮遇害之時 吾不レ能下 為重榮作文 奏 〔二〕無罪
- 15 之於天子〔一〕 以報〔中〕其□ 故云愧【□】〔目+心〕 (恩)】
- 16 嗅野梅 或説云 重榮無罪而遇害 今世如此 殺不辜 則道不道 時不時 盖衰世之變也 夫梅為百花魁 開闢以來 色香
- 17 相備矣 雖然今世不道 而有事變 則梅花亦疑變色 香否 故嗅寒梅 試其香之有無也
- 18 嗅野梅 村云 有孔子三嗅雌雉之意也
- 19 欲寫——第一二句四字三字 鈎鎖截然易見 欲寫愁腸 則已多情練漉 所以不才於寫者 已低摧也 窮郊者 謂
- 20 韋曲也 初者非後之初 二月初之初也 二月初之三字 即野梅之起也 乱後郷閭之埋廢 其感已深 况更送於 此
- 21 乎 縱有■梅花 誰与翫之 獨字可見 憂乱惜別之情 不勝言 唯嗅野梅而已【■】〔野〕見せ消】
- 22 獨字 有皆醉独醒字勢也 举世無道而殺重■榮 我独傷之也【■】〔学〕見せ消】
- 23 補云 窮郊指重榮平生居処 寒村指韋曲也 重榮死 則雖繁華地 為窮郊為寒村耳 乎無朝無暮 從
- 24 重榮者 如影不离身也 二月与重榮初相別也 离別 乃死別也 初字含生前
- 一九一
- 1 須臾不相離之意也 注 撫史字未審 撫史書名歟 幻
- 2 天隱箋註作唐史 按
- 3 曉風抄 練漉有数説 其一云 如練裏水 以不滿也 其一云 練与鍊同 鍊レ金也 漉ハ漉レ水也 愁腸在內 而鬱々
- 4 然如鍊金 如漉水也 練漉ハ内也 低摧ハ外也 内則心之苦也 外則形之衰也
- 5 梅謂 以唐書考之 朱温則黄巢之幕下也 僖宗中和二年八月朱温降于朝 賜レ名全忠 王重榮薦之

- 5 於朝 其後朱全忠有寵 改朱為李 遂与王重栄不「レ」合 而以「二」不實之事「一」 譖「二」王重栄於朝「一」
光啓 僖宗中和ノ之後年号也 【「十竜」（龍）】
- 6 未殺死 以朱全忠為張本 故唐書王重栄賛 曰 不殺朱全忠而為「レ」全忠誅 絶「二」其嗣「一」 云々 第一句言ハ ■ 僖宗 【「乾」見せ消】
- 7 乾符二年乙未 王仙芝作「レ」乱 黄巢應之 以来天下兵乱 無一日之安 巢賊入「二」長安「一」 而国号「二」大齊「一」 便乾符
- 8 六年己亥也 明年庚子 改元廣明僖宗ノ年号 天子幸西蜀 其後中和僖宗ノ年号 八月 朱温降 賜氏名 ■ 【「二」見せ消、右傍に「年」。「二年八月」にすべき】 【氏名 ■ ■、「朱温」二字見せ消】
- 9 朱全忠「一」乱朝儀 遂殺王重栄 是等之事 結為忠臣愁腸 縱雖云班馬曹刘 不得写之 況我不才乎 三四句言 今
- 10 今「二」月 欲「レ」別「二」旅寓之韋曲「一」 窮郊指韋曲 欲「二」顯吊「二」重栄「一」 則重栄罪人也 不吊則如忘旧恩而不仁也 故倚
- 11 韋曲寒村獨嗅梅花 以写其情 且以憂唐室欲漸乱 且以恨重栄之死也 独吟愁腸 雖春如冬 故云 寒村
- 12 王重栄傳在新唐書列傳一百十二 李全忠傳在新唐書一百三十七

- 13 欲寫愁——唐彦謙ハ 在「二」王重栄之幕下「一」 憑「レ」重栄居タル者也 然ルカ 此王重栄逢「レ」害 見「レ」殺ホトニ カモナクテ 周
- 14 障無是非也 此愁悶ヲ 欲「レ」寫トモ 不才ナレハ 以詩文云「更モ 愧カシ、其愁情ノ多キニ 絹ヤナン トヲ 練リ洗
- 15 フテ モミソコナウヤウニ 憤悶ニ モミソコナワレテ 身モ クツワレテ 低摧シテ クツタリト 成ル也 別ノ子細テモナシ 此窮郊
- 16 韋曲ニテ 二月ノ比 初シテ 我大切ニ 思フ 重栄ニ 別ル、故也 不才ナレハ 彼愁腸モ 難寫憤悶 難遣只倚寒【比（頃）】
- 17 村野梅ヲ カク而已 不平ノ心中ヲ ロニテハ 難「レ」云イ者也 王羲之カ 憂「レ」晋乱 撚「レ」花嗅「レ」香ヲ 無「レ」言心ヲ 用也 又此嗅ノ字ハ 孔子ノ山梁雌雉三嗅テ 置之心モ アル也
- 19 和云 処々桼榆樗櫟才 天寒一例葉凋摧 春光幾日 無尋処 喜見深林一樹梅 刊刻
- 一九二（白紙）
- 一九三
- 一 養按 玉海卷第一百七十一曰 漢 樂游苑 宣紀神爵

- 三年春 起樂遊苑 注 師古曰 三輔黃圖 在杜陵西北 又関中記云【この行まで「曲江春望」原典テキストが置かれている】
- 2 宣帝立廟於曲江之北 號樂游 注 在秦為宜春苑 黃
圖 曲池 漢武所造 周廻五里 案 其処 則今之所
呼樂游
- 3 庶者是也 其餘基尚可識焉 蓋本為苑 後因立廟 西
京雜記 宣帝樂遊廟 亦名樂遊原 基地最高【樂遊原】
左傍に「樂遊苑亦名」とある】
- 4 四望寛敞
- 5 文選 顏延之 讌曲水詩 注 水經注曰 旧樂游苑
宋元嘉十一年 以其地為曲水 范曄樂游應詔詩 注
丹陽図経曰【「日*華」(嘩)】
- 6 樂游苑 宮城北三里 晋時藥園 梁亦有樂游苑 云々
唐元宗樂游園宴詩云 地入南山近 城分北斗餘
- 7 宜春下苑 漢書列傳四十二 貢禹傳 奏言云 天使納
奏其忠 乃下詔 令大僕減食穀馬 水衡食肉獸 省宜
8 春下苑 以与貧民 云々 史記 師古注 宜春下苑
即今京城東南地是
- 9 同日 漢宜春下 元統初元二年三月 詔罷水衡禁園
宜春下苑必別有ノ上苑 少府攸飛外池 嚴鑣池田 假与貧
【「下」「元」間に挿入符あり、右傍に「苑」。「宜春
下苑」にすべき】【「水衡」右傍に「官名」】

- 10 民 師古曰 宜春下苑 即今京城東南隅曲池是 實
禹傳 元帝即位 奏言 獨舍長安城南苑地 以為田獵
11 之園 自城西南至山 西至鄠 皆復其田 以与貧民
天子 納善其言 廼下 詔令省宜春下苑 以与貧民
宜春【「細」某字見せ消】
- 12 之名 漢史凡三出 實為為兩地 曰宜春苑者 地属
下杜 宜春宮曰下苑中宮也 皆秦剏 曰宜春觀者 則
在鄠縣 右扶風縣名
- 一九四
- 1 漢武所造 注 東方朔傳 武帝東游宜春 云々 師古
曰 宮名 在杜縣東 即唐曲江也 唐芙蓉園 太宗
紀
- 2 正觀七年十二月 甲寅 幸芙蓉園 注 芙蓉園本隋離
宮 居地三十頃 周廻十七里 刘餘曰 園本古曲江
隋【隋(隋)】
- 3 文帝改名芙蓉 已上所考樂苑之
- 4 杏艷——淵云 花能開者 勝晚霞之紅也 艷嬌字 下
奪字 妙也 言貴妃顔色奪晚霞也 今日荒涼 只有
- 5 年華 無厠也 云宜春 云樂遊 其所名可知也 蓋雖
樂之遊 宜于春 祇今無樂遊 又不宜春也
- 6 梅云 十里二字 謂春望之遠 作者常語也 杜牧 春
風十里朱簾捲之勢也【山谷詩を杜牧の詩に誤植したか。

『茗溪漁隱叢話前集』卷四十七（四庫備要本）に引く『漫叟詩話』に「山谷晚年……又『甲子春過揚州芍藥未開』一首 春風十里珠簾卷 髣髴三生杜牧之……」のように見える」

7 村云 彦謙作此詩 玄宗百餘歲之後歟 詩意可見 昔

日美人嬌艷之色 只今讓杏桃乎 盖【詩】「玄」間に挿入符あり、右傍に「時」。「作此詩時」にすべき】

8 謂春望之景也 凡懷古詩 說【二陵谷變【一】 則不意尽在其中也【一不】「意」間に挿入符あり、「尽」右傍に転倒符ある。「不尽意在其中」にすべき】

9 桃云 第二句 一義以樂遊為処名 則与宜春重複 盖

樂之遊也 此義不可也 凡年華 歳 物華 言春【「歳物華」、「歳」間に挿入符あり、右傍に「華」。

「歳華 物華」にすべき】

10 花 夏實秋冬枯槁也 四時運轉義也

二 補云 此詩合秦漢為一 以作【レ】之諷【二唐帝【一】也 云【レ】無庸 云【レ】皆陵墓 其語雖【レ】反 不

【二以【レ】辞害【レ】【一】志 盖皆陵墓 言其人死尽【「尽」後に挿入符あり、右傍に「耳」。「死尽耳」にすべき】

12 續翠 皆陵墓三字 不啻言漢朝冠盖 秦漢亦含蓄于

其中也 虞伯生詩 風雨一變衣冠地 城郭朝

13 来 水石□ 与末句似焉【□「米」（幽）】

14 村云 曲江ハ 京邊ニ アル 名園也 人ノ多ク遊樂スル在処也

15 杏艷——曲江ノ景ヲ 遙カニ 見ワタセハ 杏花ヤ

桃花ヤ サキ乱レテ 紅ナル也 晚霞 晚景ノ 霞ノ

紅ナル色

16 ヲモ 此桃杏ノ 紅ハ 奪ウ ホトニ ナル也 晚

景ハ 霞カ 夕日ノ 紅ニ 映シテ ツヨク 紅ナル者也 桃抄 奪晚霞トハ 霞ノ

17 色ハ ウツクシイ物チヤカ 此花ノ 色ハ 霞ヨリ

ウツクシイホトニ 晚霞ヲ 奪ト云タン 又桃抄云

第二之句 昔ニカ

18 ワラヌモノトテハ 春ニ ナレハ 花ノ 開タリ

ナントスル 年華マテソ 此曲江ニハ 漢宣帝ノ 廟

ノ 樂遊廟ト 云カ 昔ハ アリ

19 シカ 今ハ 无【二其廟【一】 春ニナレハ 花サク

杏桃ノ 如キ 年華ノ アル而已也 前朝ノ 公俟ノ

冠盖ヤ ナント、云 大名富

20 貴ノ人モ 今只墓ヤ ハカト ナルマテ也 只古ニ

不【レ】換有、物トテハ 十里宜春下苑花而已也 杏□是

也 此詩モ【□「木+兆」（桃）】

21 借【二漢之吏【一】 當代ノ唐ノ吏ヲ 諷シテ ツ

クル イカナ玄宗ノ 盛ニ 驕ルト云モ 皆陵墓ニ

成ル也

22 年華 **歳華** 物華ナントハ 一年ニ 春夏秋冬ト

換シテイウ云ソ 秋冬ハ 万物カ 枯尽テ 春ニ 成
レハ 花

23 サキ 夏ハ 実ル 意テ 華字ヲ 用ソ 只杏花桃

花ナント 云花トハ カワルソ サルホトニ 華字ト
花字ト 韵

24 **ヲ**フンタソ 重ハ セヌソ 此例多ソ 韵書ニモ

兩出シタソ 冠盖ハ 人物ト云心ソ 冠ヲ 著テ 盖
ヲ サシテ アル

一九五

一 人トモト云心也 冠盖相結ト云ハ 冠ヲキ 盖ヲ サ

スモノカ 往来不「レ」絶ヲ 云ソ

2 **幻**■云 一之句ト 四句ト 相映シ 二之句ト 三之

句ト 相映シテ 可見ソ 如「レ」此景ヲ 云内ニ 玄

宗ヲ **云**ソ 秦漢ノ **【**■**】**「謂」見せ消

3 代ニ 色々ノ 更ヲシテ 遊シ 驕タコトヲ 玄宗ノ

前車戒ヲ 不「レ」念シテ 驕テ 唐ノ天下ヲ 失タソ

4 或本曰 十里ハ 思ニ 其宜春苑十里計ナラン

5 **雪**云 杏艶云々 盖第一句言曲江春望之景也 第二句

言昔所崇建之庙宇 今已蕩尽 獨有杏**桃**之弄年華耳
案

6 温公曰 **唐之曲江** 安史乱後 其地盡廢 文宗覽子美

詩 江頭宮■殿■鎖千門 細柳新蒲為誰綠 因建

【「唐」「園」「苑」「領」四字見せ消】「唐之曲江

……落霞亭」は『茗溪漁隱叢話前集』卷十三（四庫備要

本）に引く「『迂叟詩話』云 唐曲江 ……歲時賜宴」

にほぼ同文のものが見える】

7 紫雲落霞亭 云々 与此句可并案也 雪云 第二之句

起第一句也 第四之句 起第三之句也 杏艶云々 村

庵云 **明**

8 皇出游時 美人与杏桃爭其艶 今則无其人 唯有杏桃

奪晚霞耳 漢朝——雪云 二句 言昔年所遊幸

9 之士 皆成陵墓而纔有花存而已 老杜樂游園歌云 樂

游古園峯 森爽 烟碧草「二」綿「二」萋々々々 長 同意

【「烟」「碧」間に挿入符あり、「綿」右傍に転倒符あ

る。「烟綿」「二碧草」「二萋々々々 長」にすべき】

10 和云 淡烟遠水接殘霞 草木青々自歲華 廢苑荒陵

人到少 隔林猶見鹿□花 刊刻【□「ロ*御」】

二 杜詩三卷 哀江頭 少陵野老吞声「レ」哭 春日潜

行曲「江曲」江頭宮「殿鎖」千門 細柳新蒲為誰綠 憶昔

霓旌下「レ」南苑 云々

一九六

一 郭宮 注 石氏事之 々字也字數 箋注無之字

陸龜蒙 新唐書列傳一百二十一 隱逸傳【この行まで

「鄴宮」原典テキストが置かれている

2 靚粧 注 文選蜀都賦云 都人士女■絃服靚□（リツ）

注 劉曰 蘇林曰 絃服謂盛服也 張揖曰 靚謂粉■

「女」見せ消【「絃」「服」間に「縣」。「絃」字の音を示すか】「靚」□間に挿入符二つ並び、右傍に「才姓」。「靚」字の音を示すか【「靚」左傍に「靚明也」とある】【□「米*壯」（粧）】

3 白黛黒也 韓退之東都遇春詩 桃李晨靚粧

4 續翠云 此詩亦謂唐也 石氏豪奢 比五楊各為一隊

着一色衣以遊也 村云 此詩諷玄宗惑貴妃也

5 花飛——杜詩第四 曲江 一片花飛減却春 風飄萬点

正愁人 蓋春暮花飛 則蜂蝶也 愁之 況遊客盛 雖

然 石氏

6 不愁者 別有如花之女也 白櫻桃 外言「レ」花 内指

「二」鄭氏女「一」也 此義松云 村亦云 言女粧飾如

此耀映曉日

7 水殿雲廊 言水辺殿 夏而□ 雲中廊 冬而暖也 曉

日——宮中千人女 曉起靚粧 同出遊于櫻桃樹下 其

所【□「シ*京」（涼・涼）】

8 着者 紫綸巾也 綸字 寒韵也 唐詩鼓吹作冠音 若

双韵体 則一韵而音燐也 林和靖詩 草泥行郭索 雲

9 木響鈎輶 此兩句双声也 郭索入声 鈎輶 尤俟幽也

或云 此詩非双韵格

10 桃云 粉白黛緑ヲ 掃テ 出立タル 千騎ノ女ノ中

ニモ 季龍力 最愛ノ鄭櫻桃コソ ミメモヨク 出立

ヤウモ 面白

11 ケレ 紫綸巾着タカ 第一ノ花ヤカサチヤン 養

謂 紫綸巾 千騎女 所著也

一九七

1 歐次 皮日休西塞山泊漁家詩 白綸巾下髮如絲 注

綸音閑 綸乃青絲綬 又巾名

2 養按 玉海卷八十 車服部 鹵簿 有文事 必有武備

故整物之駕 嚴師兵之衛 總名鹵簿 唐人謂鹵

櫓也 甲楯之別名 兵衛以甲楯居外 為前導 皆著之

簿 故曰 鹵簿 注 五礼精義曰 鹵 大盾也 以大

盾

4 領一部之人 故言鹵簿

5 注 鹵簿 天子行幸時 兩列先驅者也 補云 鹵ハ

大楯也 簿ハ 着帳也 桃曾講史記時云 鹵ハ タテ

ヤ

6 楯ノ面 誰某ハ 某官ニテ 誰人ノ前後ニ アルナ

ト、云ヤウナ 次第ヲ カキツケテ ソレヲ 天子

御幸第一番【「幸」「第」間に挿入符あり、右傍に「ノ

時二」。「御幸ノ時二」にすべし】

7 ニ トヲセハ 人カ見テ 能知次第ヲ 鹵簿ト云也

- 8 雪本云 白櫻桃 唐太宗文皇帝撰御晋書 載記第六
石季龍 勒之從子也 性殘忍 勒為「レ」聘「二」將
【「帝」撰「間」に挿入符あり、「御」右上に転倒符あ
る。「御撰」にすべき】 【「從子」左傍に「ライ」】
9 軍郭榮妹「一」為妻 季龍寵惑「二」優僅鄭櫻桃「一」而
殺「レ」郭氏 更納「二」清河崔氏女「一」 櫻桃又譖而殺
10 之 云々 季龍常以女騎一千為鹵簿 皆著紫綸巾
熟錦袴 云々 櫻桃美麗 擅「二」寵宮掖「一」 樂
府【■「古」字書きかけ、見せ消】
11 由是有鄭櫻桃歌 唐李頎歌曰 石季龍 僭「レ」天「一」祿
擅「レ」雄豪 美人姓鄭名櫻桃 々々美顏香且澤 【「澤」
左傍に「ウルフ」】
12 娥々侍「レ」寢專「レ」宮掖 后庭卷衣三万人 翠眉清
一鏡不「レ」得「レ」親 官庫女一千足 繁花照耀漳河春
13 織成「一」花映「レ」紅「一」綸巾 紅「一」旗製「一」曄「一」鹵簿新
云々【「製」左傍に「ヒ」。「紅」旗製「一」曄「一」鹵簿新「一」にす
べき】
14 事文類聚別集六 古之用事 鹵与櫓同 本載兵器之
籍 因名鹵簿 海録
15 幻云 題注 宮殿簿トハ 宮殿事ヲ 書付タ籍也
熟錦ハ ヨク子ツタ 錦也 幻又云 桃櫻ハ日本ノ
【「云」桃「間」に挿入符あり、「櫻」右傍に転倒符あ
る。「櫻桃」にすべき】 【「子ツタ」(ネツタ)】
16 サクラン
17 雪云 花飛云々 全篇言 一片花飛愁人 然季龍獨
不然 盖有似花之人故也 三四句述之也 白櫻桃 千
騎女之
18 將也 紫綸巾 千騎女之攸着也
19 雪云 此詩在唐詩四十五 鄴宮詞二首 前篇云 魏
武平生不好香 楓膠蕙炷潔宮房 可知遺令非前事
20 却有餘薰在綉裳 後篇此詩也
21 注 鹵簿者 車駕行 羽儀双導 謂之鹵簿 自秦漢
始有其名 後胡廣作天子出行 鹵簿 大槓也 所以
22 捍敵部伍之次 皆著之簿 故言鹵簿 已上舊本【「捍」
左傍に「捍 玉篇 何旦反 衛也」】
23 和云 古城殘礎埋荊棘 苑樹宮花依旧春 草銅臺歌
舞尽 寒鳥啼後客沾巾 刊【「草銅」句は一字脱落】
一九八
一 閼鄉 旧註 閼音文 元音民 字本作閼 献帝建安中
改作閼 旧註 後漢志 弘農郡有閼鄉縣【この行まで
「閼鄉ト居」原典テキストが置かれている】
二 又云 出王半山詩註 楊震 盖弘農華陰人也 然則阿
對泉在閼鄉決矣 然則以下ハ 幻解也 【「楊震」右下に「字伯
起」とある】
三 大明一統志二十九 河南府州一 縣十三 洛陽縣

- 云々 陝州在府城西三百里 周為號國地 云々 漢置
- 「二」陝縣「一」為
- 4 弘農郡 云々 閿鄉縣在「二」州城西一百三十里「一」
本漢湖縣之閿鄉 属「二」京兆尹「一」 因律以名邑 後
周於「二」湖城故地「一」
- 5 置「二」閿鄉郡「一」 隋初廢郡 後至今治為閿鄉縣 唐
貞觀初置「二」州「一」 尋廢州以縣 属虢州 宋属
「レ」陝州 元以「二」日「一」折「一」
- 6 湖城縣省入 本朝因之 編戸二十四里 阿對井在閿鄉
縣西南 阿對乃漢楊震家僮 嘗引泉灌蔬 因名
- 7 唐吳融詩 六載抽毫云々 阿對泉頭一布衣
- 8 養按 韓文二十七卷 試大理評事 王君墓誌銘 注曰
集注 弘農 胡縣有閿鄉 汝南西平右閿亭 前漢以胡
閿「王君」右傍に「王適」とある
- 一九九
- 一 鄉邪里聚為戾園 注云 閿字 本從旻 其後轉訛 誤
作門中受耳 閿音聞 又亡云切 雪本 閿鄉者 黃巢僭
號 傳
- 2 宗奔于蜀巢 誅乃還 昭宗之立 雖有英氣 而內為官
官所幽囚 外為強臣所劫遷 朱全忠遣人入誅殺帝
- 3 吳融於此時 卜居於閿鄉也 至哀宗亡矣 唐歷世二十
歷年二百九十年也
- 4 題注 陝音閃 說文 陝字注 說文 弘農 陝也 古
號國 云々 又州名 周召伯分■之地 云々 毛氏曰
說文 从■从夾 々音「分■之地」、「陝」見せ消、
右傍に「陝」。「分陝之地」にすべき「从■」、「鳥」
書かけ、見せ消。右傍に「皐」。「从夾」、「夾」
見せ消。右傍に「陝」の部首「卩」をとった字
- 5 閃 与 ■ 隘字不同 注 ■ 作 ■ 非也「■ 隘」、「陝」
見せ消、右傍に「陝」。「陝隘」にすべき「注 ■」、
「陝」見せ消、右傍に「陝」。「作 ■」、「陝」見せ消、
右傍に「陝」。「注陝作陝」にすべき
- 6 才子傳 吳 字子華 山陰人 初力学富辞 調工捷
龍紀元年李 ■ 榜及進士第 韋昭度討蜀 表掌書記 坐
累去「融」「字」間に挿入符あり、右傍に「融」。「吳
融」にすべき「■ 某字見せ消、右傍に「瀚」。「李瀚」
にすべき「」。「龍紀元年」右傍に「昭宗年号 唐至昭帝
子哀帝亡」とある
- 7 官 流浪荆南 依成汭 久之 召為左補闕 以礼部郎
中 為翰林學士 拜中書舍人 天復元年元旦 東内反
正 既「天復」右傍に「昭宗」とある
- 8 御樓 融最先至 上命於前座跪草十數詔 簡備精當
皆不頃刻 皆中旨 大加賞激 進戸部侍郎 帝幸
鳳翔 融不 及 從 去客閿鄉 俄召為翰林承旨 卒 為
詩靡麗有餘 而雅量不足 新唐書列傳百二十八 文藝

10 傳 載吳融

反正 再復「レ」位云也

十八史 唐中宗 云々

又八年而復反正 注 復帝位

11 六載——或云 凡在朝廷思江湖 在江湖思朝廷 君

子之常 此詩為未歸鄉在朝廷時作 則意深矣 盖「常」

右下に「也」。「君子之常也」にすべき」【「郷」

間に挿入符あり、右傍に「闕」。「未歸闕郷」にすべき】

12 在朝長詠ト居篇之■也 謂 幻謂此■義無用 按

才子傳 天復元年昭宗鳳翔 融不及從「之■也」「理」

見せ消、右傍に「謂」。「長詠ト居篇之謂也」にすべき】

【「此■」「無」見せ消】【「宗」「鳳」間に挿入符あり、

右傍に「幸」。「昭宗幸鳳翔」にすべき】

13 去客【「闕郷」時作也 六載抽毫謂為「翰林学

士「一」拜「二」中書舍人「一」乎 天隱注 昭宗時為翰

林承旨 此義非乎

14 為翰林承旨者 去客闕郷之後也 然則此詩未「レ」為

【「二」承旨「一」以前作也 又増註 吳融■昭宗時迁累

侍御史

15 云々 按才子傳并履歷無迁【「二」御史「一」之事 以俟

【「二」博聞「一」 此義非 見下

16 蘭譜云 吳融七歲 為【「一」翰林承旨「一」 禁闈

礼部所一居也 融自六歲在朝廷 侍礼部之所居也 六載

乃六齡

17 也 非六箇年也 幻又按 才子傳履歷 無此更 不

知出于何書 未審

18 吳融 本越州人 昭宗時 自光化元年戊午首夏 至

天復三年亥 掌【「二」綸翰「一」 凡前後六載也【「年」

右下に「癸亥」にすべき】

19 續翠云 天下ノ勢 イカホトモ 久ハアルマイト

思テ 托老病請暇也 六年間ハ 可帰ト 思■ヘトモ

不遂 今コソ【「テ」見せ消】

20 真實鼎也 杜詩 聖朝無棄物 老病獨成翁之類也

五陵ニハ 貴人ナラテハナイ 其人カ 萬一 アラ

カワ

21 イヤ 吳融ハ 何在ト云ワハ 布衣ニテコソ アレ

ト 傳語ヲシタソ 此年少不救天下乱者也 吳融傳語

22 ワ ニクサウナ

桃云 侍禁中 天子マチ

カウ マイリタシカ 欲「レ」納「レ」諫トモ 志モ 不

達シテ 如此天下破【「納」左傍に「イレント」とある】

二〇〇

一 ホトニ 今御トモヲ シタリトモ 曲モ アルマイホ

トニ サテ 決然トシテ 御暇ヲ 申シテ 帰也

2 阿對——弘農ノ邊ニ 揮翰ノ手ヲハ ウチライテ 鎌

ヤ 鋤ヤ ナント 把テ 自耕シテ イタト 云ヘン

【「ナント」右上に「臨」某字がある】

3 木蛇云 此詩阿對泉トハ ナセニ 云ソ ト云ヘハ

有故也 唐萬回師■終 求「二閣鄉之水「一」 然則阿對泉【■「臨」見せ消】

4 知「二是名水「一」也 萬回所死之地 与「二閣鄉「一」路相矣 然求「二其水「一」 鑿「二戸庭前地「一」 湛「レ」水飲「レ」之死也 偏法申【「相」「矣」間に挿入符あり、右傍に「隔」。「路相隔矣」にすべき】

5 一処之義歟 又義 阿對セヨト 訓也 言宜荅年少也 此義非也 又阿 誰字 訓為誰也 阿對乃誰

6 歟之義也 村云 此義非也 阿對 伯起 童名也 又名其所疎之泉 曰阿對泉也

7 梅謂 三四句 用論語閔子騫汶上之意

8 履歷曰 吳融 字子華 越州山陰人 竜紀初及進士第 韋昭度討蜀 表掌書記 迁累侍御史

9 後為左補闕 以礼部郎中 為翰林學士 拜中書舍人 昭宗反正 進戸部侍郎 終翰林承

10 旨

11 太平廣記 百八十三 吳融 廣明中和間 久負屈声 雖未擢第 同人率多執贄謁之 如先達 出撫言

12 曆志云 伏在紫宸 夾香案 分立■殿下 直第二螭首 是所立在殿下 至宋 歐陽永叔曰 請立■上前

【「立■殿下」、「展」某字書きかけ、見せ消】【「立■上前」、「前」見せ消】

13 北面 而雖近唐□ 而非居下 是慶歴所立在殿下也

【「□」字右傍に書き入れ「制」とある】

14 唐詩鼓吹 許渾詩 纔帰「レ」竜一尾含「二」鷄一舌「一」 更立「二」螭一頭「一」運兎毫 郝天挺注 唐書大和九年十二月 左右省起

15 居郎 □筆硯及紙於「二」螭一頭下「一」 記「レ」言記「レ」更「レ」更「レ」□ 右傍に挿入符あり、行末尾に「賚」とある。「賚筆硯」にすべき【「更」後に小文字で「事」とある】

16 楊誠齋 江東集第四 可堪衰病兩相纏 更苦懸車尚五年 然則与病也【「則」「与」間に挿入符あり、右傍に「衰」「衰与病也」にすべき】【「年」、「子」(ネン)】

17 ■云 布衣ト 讀ム也 史記春申君力傳也 史記テハ一布衣■ 詩テハ ナニト ヨマウトモ マ、也【「■云」、某字見せ消、右傍に「幻」。「幻云」にすべき】【「一布衣■」、「ヲ」見せ消、右傍に「ソ」。「一布衣ソ」にすべき】

18 養按 史記列傳十八 春申君傳曰 楚■■歎与太子完入質於秦 々留之數年 楚頃襄王病 太子不■■便「レ」歌「二」字見せ消、「便」右傍に書き入れ「使」。「楚使歎与太子」にすべき【「歎」右傍に書き入れ「即春申君」とある】

19 得飯、云々 於是黃歇乃說應侯曰 相國誠善楚太子

乎。應侯曰。然。歇曰。今楚王恐不「レ」起疾。秦不
「レ」如「レ」飯。「二」【「知」見せ消】

20 其太子。「二」太子得立。其事。秦必而德。「二」相國。

「一」【「無」レ窮。是親。「二」与「國」。「一」【「萬」乗也。若不飯。則咸陽「一」ノ布衣耳。云々】「【「萬」間に挿入符あり、左傍に「儲タクワヘン」。また、【「右傍に「得本尔」。「得儲萬「乗」にすべき】

21 六載——六載ヨリノ 点アリ 幻ハ 不取此義 唯六箇年之義 可也 村義云 六箇年マテ 昭宗代ニ翰林学セテ

22 マテ 文章ノ 筆執リヲシテ イタル也 今飯隱セウス ■ト思フタレトモ 今日明日ト スルホトニ 六箇年マテ イ【「今日」左傍に「ケウ】 【「明日」左傍に「アス】

二〇一

一タル也 去程ニ 今ハ 多病ニモナリ 毎事衰ヘイスル 間タ 思イキリテ 勇退シテ 帰隱閬郷ニ ト居スル也 サスルホ

2 トニ 五陵ノ 京ニ在ル ワカイヤウナル者カ 吳融ハ 何ト 成タルソ 今ハ トコニ イタソ ナン ト、 問フ事モアレハ、 閬郷

3 ノ 阿對泉ノ頭ニコソ 布子ニテ 布頭巾ニテ コソ

イテアレト 云ウヘキ也 養私按之

4 雪本 六載云々 詩話総龜 福唐 蔡伯禧 四歳對真宗誦詩 授校書郎 春伴讀 云々 又王元之五歳能詩【「春」伴「間」に挿入符あり、右傍に「宮」。「春宮伴讀」にすべき】

5 太守因賞白蓮 召而吟一絶云 昨夜三更後 嫦娥墮玉簪 馮不敢受 捧出碧波心 又東都叟略 刘【「太」右上に挿入符あり、「因」右傍に転倒符ある。「因太守賞白蓮」にすべき】 【「馮」「不」間に挿入符あり、右傍に書き入れ「夷」。「馮夷不敢受」にすべき】

6 怨年四歳 坐客有言孔子無兄弟者 怨應声曰 以其兄之子妻之 一坐皆驚異 云々

7 押者 自簪而拔筆 用之也 劉和云 昔年捧檄向慈幃 今日低摧白首飯 重葦茅簷栽旧菊 角巾底下緑荷衣 劉刊刻【「幃」右傍に「圍敷」とある】

8 尤溪道中 才子傳 韓偓 字致堯 京兆人 云々 天復中 王溥 薦為翰林学士 迁【「中書舍人」】 從【「昭宗幸」】 【この行まで「尤溪道中」 原典テキストが置かれている】 【「天復」右傍に「昭宗」とある】

2 鳳翔【「進兵部侍郎 翰林承旨 嘗与崔胤定策 誅

劉季述 昭宗反正 論為功臣 帝疾宦【「崔胤定策」右傍に「同平章吏」とある】【「劉」右傍に「宦者」とある】

3 人驕横 欲去之 僱畫策稱旨 帝前膝曰 此一吏終始以屬卿 云々 李彥弼僱甚 因譖僱漏禁省【畫(画)】

4 語 帝怒曰 卿有官屬 日夕議事 奈何不欲我見韓学士邪 帝勵精政事 僱處可機密 率与上

5 意合 欲相者三四 讓不敢當 僱喜僱有有位 朱全忠亦惡之 乃構禍貶濮州司馬 帝流涕曰 我左右【「朱全忠」右傍に「後梁太祖」とある】

6 無人矣 天祐六年 復召為學士 僱不敢入朝 挈其族南依王審知而卒 自号玉山樵人 工詩有

7 集一卷 又作香奩集一卷 云々 新唐書列傳一百八 載韓僱 後梁以王審知為閩王

8 尤溪 輿地要覽二 泉州人物部 韓僱左迁 家于泉又按劍南州与泉州隣也 皆福建路

9 方輿 泉州部 韓僱寓南安詩 枳離茅屋共【「レ」桑麻南安 泉州縣名 又云 天寶後為清源郡】

10 乾元復為泉州 唐末為王潮王審知所有 本集泉州軍退後 人家空作也

11 大明一統志七十七 福建 延平府領縣六 云々尤溪在尤溪縣洲 多【「二尤姓【「一」故名 今尤氏自言上世本姓】「福建」左傍に「南唐改置劍州」とある】

12 沉 避王審知諱 故改云【沉(沈)】

13 高秀實云 韓僱香奩集 麗而無骨 李端叔意喜致元詩 誦其序云 咀五色之灵芝 香生九竅 咽【「高秀實云……美動七情」は『彦周詩話』(百川学海本)にほぼ同文のものが見える】

14 三危之瑞露 美動七情 遯齋閑覽云 致元寒食夜詩云 策々輕寒剪々風 杏花飄雪小桃紅 夜深

15 斜搭秋千索 樓閣朦朧細雨中 詩詞致婉麗如此絕者是是也 雪本【□「月*竜」(隴)】

16 唐音遺響二ハ 尤溪道中ヲ 作襄漢旅道軍後有感本集泉州軍退後 人家空作也

17 韓僱 字致堯 一字致元 喜僱有有位 朱全忠惡之乃構禍貶云々 南將依王審知於閩中 而道經尤溪之時作也【行頭左傍に「雪本」とある】

11011 水自云々 雪云 二句言朱全忠移都鳳翔 天下騷亂

12 違于旧 惟水依旧流 日亦未墮地也 第一句 水【□「米+心」(悉)】

13 潺湲 是比泉声幽处聞 則非也 水自——續翠云 此詩每句有疊字 謂之兩截格 又謂

14 疊字格 無人处 雞犬亦無焉 コレホト アレハテ、 4 日モ 水モ アルマイト 思タレハ コ、■ アルヨ

日ト 水トハ 治乱興亡ヲハ 不知 故如旧時也 是ハ 日ト水トカ 返事【**「ア」**見せ消、右傍に「**ニ**」。**「コ、ニ」**にすべき】

5 ラシタ様也 尽無——此句**■**偏躰也 千村——家ハカリ 残テ 人烟ハナシ 是ハ 誰カワサト云ヘハ 天下ノ主【**■**「備」見せ消】

6 ワサ也 是ヲ 見テハ ハツカシカラウス 鳴鴉ハ人チカウハ 無イ者テ アルカ 今コ、ニ アルソ

7 網目集覽第十卷 十餘萬落 集覽萬落 ヲ居也 人所聚居 故謂村落 屯落 院落 聚落

8 村講云 續纂云 下ヲ 鳴鴉トセハ 上モ 吠犬トスヘキカ 雞犬トスルヲ 偏躰也

9 梅謂 心田一説 文選 君舟 臣水 故以東流水 比小臣乱家國 以西日比王者無威 水之東 日之西 如君臣道

10 背 故有大乱 梅云 鴉則貪讒 譬道臣之貪也

11 不見——桃云 アルシナシトテ 春ナ 忘レソトテ花ハカリ 昔ニ カワラス 開タン

12 梅云 尋常看花忘愁 今却添愁 杜詩 感時花濺淚 恨別鳥驚心之謂也

13 文選 沈休文齊故陸昭王碑云 傾「レ」巢「レ」落注 落 村居 杜詩 空村只見鳥 落日不逢人

14 養謂 赴泉州時 經尤溪歟 其時作也

15 尤溪——村云 此詩ハ 尤溪ニ 行ントスル道中ノ事ヲ 作也 其道中ニ 兵乱ノスキタル跡ヲ 透ル也 即注ニ 所謂 泉

16 州歟也 此尤溪ノ近邊 又註ニ云泉州 旧ハ 家モアル在所ナルカ 今兵乱ノアル後ナレハ 家モナク野原トナル也

17 古ニ カワラス物トテハ 水ノ不絶潺——ト流レ 日ノ不変 常ニ 東ヨリ 出テ、 西ニ 落ルマテ也 人倫モナク 家モ アラハヤ

18 雞犬トテモ 一向ニ 无キ也 日モ 斜ナレハ 只鳴鴉ノ 飛マワリテ アル而已 サスルホトニ 千村万落モ トコモ 寒食ノ 如ク

19 火ヲ 禁スル様ニシテ 物ヲシテ クウ 烟モ 不「レ」見 只花サキミタル、而已 桃云 アルシナシ如晦説ニ 此詩ハ 如寒食ト 空見「桃云 アルシナシ」見せ消か】

20 花トノ字テ モツタナリ 泉州軍過タアトノ ナリ

21 无象太平還**■**有象 **■**炊烟起処是人家ト 云テ 太

平象ト 云テハ 別ニ ナイソ 民ノカマトニ 物シテ クウ 炊烟ノ「**■**有」、「及」見せ消【「**■**炊」、「煩」見せ消】「无象……人家」は『蘇軾集』卷四(明海虞程宗成化刻本)に同文のものが見える】

22 炊烟ノ「**■**有」、「及」見せ消【「**■**炊」、「煩」見せ消】「无象……人家」は『蘇軾集』卷四(明海虞程宗成化刻本)に同文のものが見える】

23 炊烟ノ「**■**有」、「及」見せ消【「**■**炊」、「煩」見せ消】「无象……人家」は『蘇軾集』卷四(明海虞程宗成化刻本)に同文のものが見える】

24 炊烟ノ「**■**有」、「及」見せ消【「**■**炊」、「煩」見せ消】「无象……人家」は『蘇軾集』卷四(明海虞程宗成化刻本)に同文のものが見える】

25 炊烟ノ「**■**有」、「及」見せ消【「**■**炊」、「煩」見せ消】「无象……人家」は『蘇軾集』卷四(明海虞程宗成化刻本)に同文のものが見える】

26 炊烟ノ「**■**有」、「及」見せ消【「**■**炊」、「煩」見せ消】「无象……人家」は『蘇軾集』卷四(明海虞程宗成化刻本)に同文のものが見える】

22 起ルカ 太平ノ象ソト 云タカ 今此処ハ 貧居

往々無烟火 不独明朝為介推ト 云タ如ク也 幻義

【「貧居……介推」は『全唐詩』卷057（揚州詩局本）

孟雲卿「寒食」詩にほぼ同文のものが見える】

23 和云 油笠肩輿石径斜 一声杜宇数声鴉 隔林■雨

過行人語 滿香風茉莉花 路 刊刻【「滿」「香」間に

挿入符あり、「路」右傍に転倒符ある。「滿路香風茉莉花」にすべき】

二〇四

已上共二十四首

桃抄 或第三句喚第四句之格也 如寒食字 喚第四句

不見人烟四字也 或說第二句尾三【「之格也」右傍に「雪

亦然」とある】

字 起第三四句 蓋醉不迷 自無塵 別置春等也 天

隠解不出之 不足取焉

〈異体字一覽〉（一）に通行体を入れた。なお、【一】にお

いて*印と+印で記すものを掲げない。また、操作困難なため、一部ユニコードには文字がないものも割愛した。

韵（韻） 往（往） 華（華） 會（會） 盖（蓋）

鮮（解） 廻（廻） 畫（画） 氣（氣） 亘（亘）

虚（虚） 京（京） 況（況） 教（教） 國（国）

溪（溪） 雞（雞） 决（決） 縣（縣） 俟（候）

比（頃） 雜（雜） 參（参） 尔（爾） 吏（事）

皆（時） 實（実） 寫（寫） 邠（州） 疊（疊）

沉（沈） 巢（巢） 翠（翠） 隋（隋） 節（節）

偕（偕） 栾（桑） 藏（藏） 續（続） 太（大）

臺（台） 但（但） 腸（腸） 敵（敵） 博（博）

荅（答） 當（当） 德（德） 柰（奈） 博（博）

發（発） 廢（廢） 范（範） 弼（弼） 席（席）

富（富） 并（並） 篇（篇） ム（某） 兒（貌）

无（無） 面（面） 离（離） 刘（劉） 灵（靈）

楼（樓） 鼓・鼓（鼓） 曾・嘗（嘗）

〈付記〉本稿は2016年度中華人民共和国国家社会科学基金項目資助（一般項目/項目号16BZW062）、並びに中央高校基本科研業務費專項資金資助（項目号SKZZY2015064）を得たものであり、その研究成果の一部とする。

リュウ レイ／北京師範大学外国語文学学院 副教授
（二〇一六年十一月二十七日 受理）